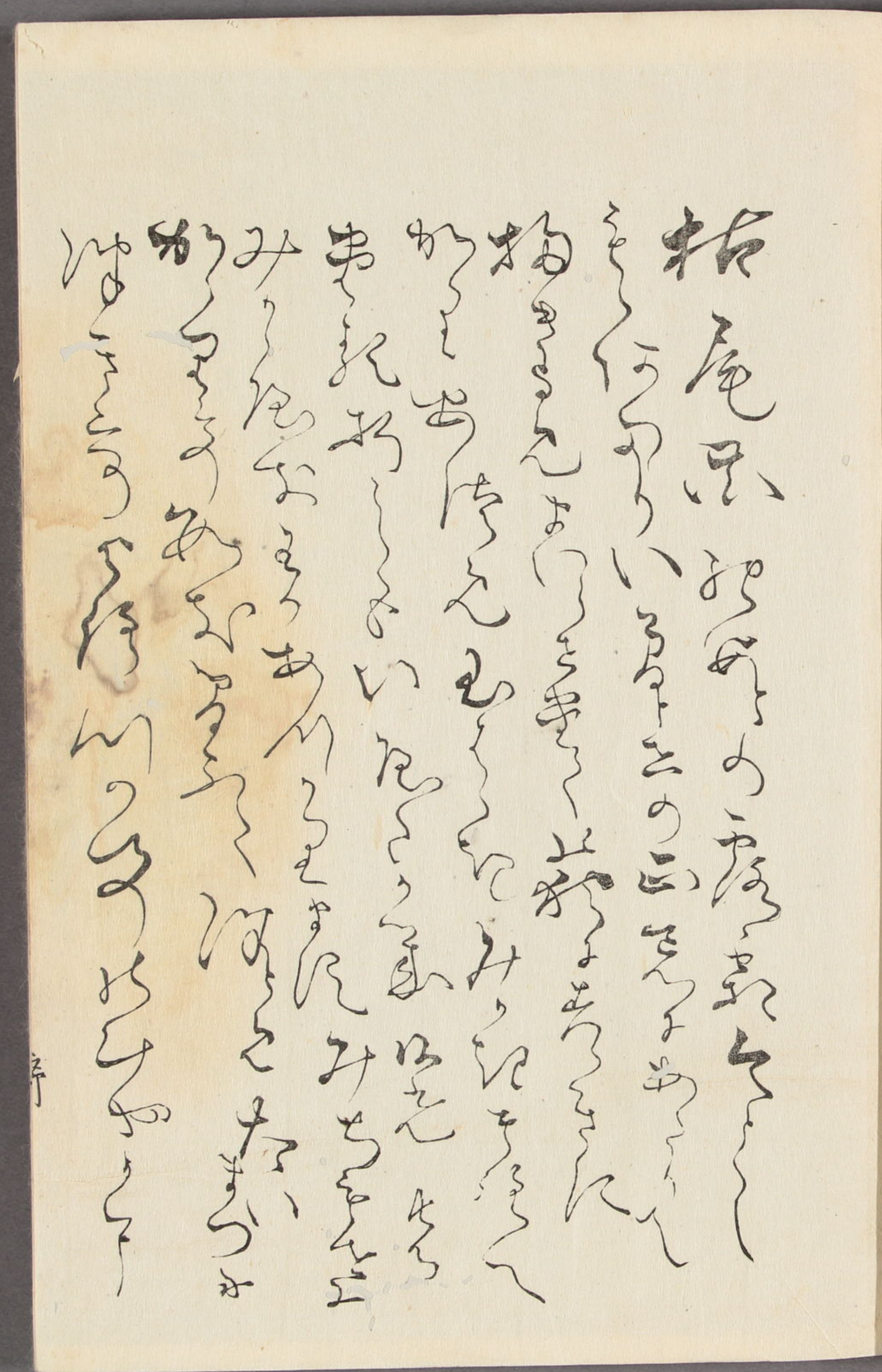
愛敬二の法華
全



編起俳諧之連歌

いうあしゝ文書やゝ所の純の梅うち
竹山
をゝ木をゝ紀山をゝ下道
鳳郎
ゆゝ寒きゝ川くゝ加茂て
又く
ゝゝの郭のゝ山ゝ産ゝ
井煙
紫雲乃掃除のゝく郭月松
涼松
ひゝやゝと西手警風の音
南く
法ゝ寺ゝ軍ゝ中の魂奇

瓜ゝ孫やゝ呼ゝ如ゝ三味線
李白
汁粉餅ゝ上ゝ方ゝ赤ゝ味ゝ付ゝ
風分
巨燵ゝ者ゝ銀ゝ煙ゝ乃ゝ紋
松曉
ゝ川ゝ物ゝ語ゝくゝと聴ゝ寿ゝ
寄三
ゝ志ゝ也ゝ山ゝ路ゝ加ゝ茂ゝ
半胡
何ゝ者ゝ共ゝ只ゝ人ゝ共ゝ力
遠岡
去ゝ来ゝとゝ者ゝ千ゝ素ゝ白ゝ宿
大乙
柏杞飯ハ所ゝ通ゝ屋ゝ乃ゝ
永久

題目講釈師やぢ　清水
さ、波と角と越何ふ九十九里　西馬
猫平吉ふ〳〵上張り露　太洞
算物を知つけ駄ふもなりしを　樹章
古籠刀品目利定本　呂叟
浮ふ仏さま新　袖の嵐ふ　雄太
宝みふ志ま　音好
右一順

春之部

拓殖ちんさ乎之乃ち新事の南　ラク　梅室

流るゝかちゝ隙高しまちの　卓丈

美しき文を韓ちけ迎むと鳥の　梅通

撰象ちゝ古の花乃や道ちゝ　盛年

紡意や物ち純てさうを梅ちを　セツ　多岐

掃ちあや紅の婦ちゝ素ちゝ　素孤

梅の香や新ち雑ちゝ登ちゝ　日向　駿岳

茅ちゝも物ちゝ面ちゝ尾ち荘ち南　双鳥

茅戈のちゝと出ぬや義ち補　ナハリ　黄山

さう春未も大ちゝえて山科ちゝ　而石

掃出して新所ちゝ明ちゝ　スルカ　有隣

釈の糸も未ちゝ出て吉て市　菱ち郷　サカミ　槐堂

霧ち朝霧知ちゝや寺ちゝ生ちけ　室頂

釈ちあ八鷹も寺ちゝや花ち寺　アツミ　鴈山

ちちゝ所時仮の春ち二月糸　盧白

車屋の主人出張せう兎の去　玉箒
六物とさ伸ばす地蔵の足洗ひ事　トサ　樊噲
拝むと突きしたる沙弥の風　夢迦
配猫は猫も座敷を見る日　琴石
掌体は藤さき伯母さう温泉像　元史
加一撫る筆もさる義可能　大亀
拭毛虫八重咲き度うる板皆ゑ　光夕
義八弟下手さや畑もの　アハ　嘉象

毛ふ竹孫やうもん迷ふ猫　應吏
夕ゥ紙や底根のむする時鮭　太峯
猫やう肌者ゥきる書の雪　チクコ　馬朝
ひ寄乃業遊もなぬ出屋ゥ事　イカ　雀仇
月松も松的ゥも似きるの百　カヒ　雲里
茅の木と又一枝や梅もひ　ミカハ　遊宇
木と鉄寅もつなたの物ゥ　ラク　禾明
書のしと濃と茅や河内水　ミナヌ　一之

福彩の古きを訪ふ世の人
はまだ雪もまだ重なれる梅の
消さうを見えて根つ遠うなる
眼はるる元を日ハ永く古の植根の
うら鶴ふる色さあれ雛可事
をうくとて書き畫水
ふる程の茅ふもちふ事をしも
二日春出先てすえて事ふ

上毛

赤谷
西馬
う者
涼斗
係之雄
一葉
清水
雲山

折用ふう先(さめ)海苔の色
蛙の乃ふ高雄をあ明月の事
葉陰の唄今やうて京ふ和
下ふ札をかふ事ふ郷
小松畏事さけて通ふ雪

下毛

君ふ代の塔ふ全盛ひ事
いへるを色ふ白ふ水の雲ふ
餅もや松ふ桜ふ世雪

岩水
郡雲
心足
郡雀
水足
同平
知機
要河

眼もくらむや紅日のかがやき　　巖谷
竹ちくと沼系のくらく山はたかき　　緑陰
赤き花ちらす人去枝　キク　高代め
何樹は紅そ一も桃桃のをく　　号河
水垢み脊ちうつる河岸系　　佛孫
白晴やたちさる色紅葉の西うち　テハ　更雅
星ちらし出て流ちう勢ちる紅系　　寒雲
明てのち新ちの新時ちうの新　　三チコ　茶山

板の皆紅ふ仏庵ふ自ちう事　　荘村
ちふ花や流り和ちえ生ちる勢　　カヽ　柳盞
月さして日八中ちる高尾島米の花　イセ　松波雄
中年ちう盃ちはまけちる四ちり家　　ヒタチ　對堂
出ちちの毎日紅ちる二月可郷　　桃二
うちとちとして板ちる如ふ弟山　　マツマヘ　陽山
薩ふ紅中ち桃て紅や ちる上　　怒允
七種の先八ちちる明山ち事　　ヨト　雅嶺

紫大根の里も時雨てう兎の花　見分
元日乃き純の陣一さよ釈る中　惟孝
解るや昭き中ゆく中ぬ山の雪　卓那
さ一汐を抗と見て春乙鳥の風　山分
色よ亀山侍ハ歩一　毛生迄　雀翁
竹結きうる色を生ゆ柳う那　百和
和抜るや峯ちいるもうる表　茅古
枯象乃一きしも生紀弟子茶　流し

生ゆ春ちち先純の見中柳う茶　香一
きき生山汐ゆ乃侍しか　清雪
釣うけや茶の茶ゆ加古て歳　魯心
うかひの人うもうやおほ月　甫く（ムサシ）
咲日と茂日ちして毛見う茶　孝彦
餅湯て樽那老孝う那　玉芝
一日乗立う色ちもち日う紙　杉暁
鼻先へ松うけさ人や時桂　漁水

むすび経霧のこのうち山家の事　白兎
身を鄭よりの行き抜け　晴花
鈴起の事を為て今は松のうち　一場
畑のうちも回るも拾ひ来る事　李爺
竹林八幡やうたれ出る若葉　青蔭
手を添えて引き小松の郭　保水
仕業も多のうちの雑うの事　汝平

京の松よりて澄うて猶乃慈鳳朗
彩緑降きる松月の雨　竹山
積並に結炉の炭ひ炭うけて　能
手拭う湯と紅乃餅別　山
月の事此て三夜日一日　能
秋海棠乃色色くと去る　山
中は曲うる経うち菖の咲う孫子　能
行乗城ちを色色問ふ　山

鶯の屋敷ゆたの夕暮
生駒嶽やすそ野の海面
夏祝くまて御うらハうえ地滝　朗
俗父の濡ゝ乃枝の紅の花　山
富越岩乃ゝ清くさ雪也朝の月　朗
鶯ゝ鶯乃家と答数　山
鶯強き給ふ鶯の囀　朗
信門のゝ清ゝ茶の木ゝ乃　山

毛のゝ付等君養乃ゝ為めゝて
ゝゝ情ゝ物ゝ者也雀子　朗
物輝而ゝ春つゝらふゝて生金仏　山
申刻ゝゝゝの降雨ゝ乃ゝ　朗
有ゝ付ゝ信安ゝ毛ゝ養ゝ情ゝ　山
安房と上総ハ兄弟一の宮　朗
富ゝゝ乃ゝ明徹乃嵐乃ゝ　山
林ゝ和ゝく〳〵雪候古墓　朗

血のうるさいなる小言をうとくなる

関西立身のうもむ胃し　郎

伽羅集の鉢より出るる高る月　山

慶賀つるもの集の錦代　郎

御家入小紋と後先ハ乃ふ生う　山

身うるるうもうち撥も仕ぬる戦　郎

川端の豆腐　地蔵ハうけ拂ひ　山

加茂蓋小ちる医者の島ふ多　郎

内御用貸ふ部ける蕗藤　山

ハいつ七ものう猫庭ふ二年　郎

榛家のさんくもを見まうて　山

乃ふと茨乃縄とて書る　郎

夏之部

花ゝ葉も長くかゝる牡丹哉　ミカハ　卓池

梅ゝ咲き古もまつ程の甫　スルカ　碧山

夏小菊ゝ紋のまがきや杉ゝ屋　連山

かくらの長葉つゝ蓮乃出　十二ハ　林曹

葉ゝつゝ葉ゝ杉地ゝ蔦　フレミ　岳雪

清姫も猫の恋ゝ夏姿　イセ　崔叟

恋ゝゝ葉乃清ゝ雨の峰　日向　子ゝ

震る雲の無きも何ぞや庵の蔭　ヒセン　悠々

忠志を並べて立つや数る牡丹　チノコ　夢五

ひとり和尚も船道も何ぞ蓮の中　チノセン　蓋乙

如水を浸す雲の雲の帳　セツ、　曲阜

珊瑚交らぬや扇の的の奉　アハチ　梅庵

雲八重に隔て佳人の姿　イヨ　映門

帆の山を遠て去る雁の影　トサ　化昇

暁を待つ夕べ暮れぬ　古鶯

雷を鳴る時八月の雨　アフミ　柳下

松の枝の影や隔て隔　オシ　一止

小鮒を市場の中の鮒　江三

家路に帰る峠の夕暮　ユチコ　西曙

鷹ひとり去て消る清き秋　警城

一志を水も雲に鶴川の氣　ノト　呂鳳

秋の夕峠の多の四月の雨　上毛又ニタ　隅人

手酒に小菊を立て柳田の弟　ヒクチ　野巣

うゑの時をくりて千駄の郭（下サ） 仁里
はるみち雪よ沢〳〵草もえ（サカミ） 立字
若菜を見る皆よりの料理哉（シナヌ） 月歩
一位 身をもとめもとめ色ヒタチ 李仙
竹を立る稚木牡丹の宮（ヤヒ） 舎角
山もとの夜明くるを合の蓬可雑（上毛） 竹洞
思ひもよらぬやかんを合 逸笠
花と葉のふるさと遠の郭 素水

素之 素之
飯僧 飯僧
松園 松園
雪居 雪居
松什（ヨト） 松什
落山 落山
閑二 閑二
双 双

黄色なる眼の光り鋭く
着き鋭く輝くこと
大きなる猫のうなるが如
弧を以て持ち
来る様も以て来る
経程をうつる如
みるや雲の間
うなる様
帰

由之
太乙
音好
普陽
草交九
まんの如
物巴の
第里

霞を
扇持て
以て見る
十果や
高き峰
かしの
峰さう
似て

男ふ浮第ふ
持て
見るが
見て
蒙の
嶽
峰や
高き
杜宇
蒙ふ

稲塢
横十
蒙の
毎別
湖山
呂嗅
一具
鳳凰

麻ふるや濁る雲さえ吹かれ出る　ムサシ　木澗

ちや樹ゝ雨ゝ雨ゝ雨ゝ雨ゝ自然　花谷

吹濁る男もう郭の回廊の軒　虎角

閑古鳥ちゝやハ幡乃舟奥　松一

軒の雨ゝゝゝゝさえ吹く暑さかな　千瑞

蔭ゝ白ゝ蓋吹ゝ流蓋ゝ船　源松

舟一の子ゝ無ゝゝ水日ゝ屋ゝ烟ゝ風　太魯

蓋生やけ吹ゝ乾燥ゝゝ　ゆうゝ　幻外

歌之部

[illegible]面[illegible]いやりもやめて夜ラク　杜鵑

又地面のいさらふ言やゆゑ[illegible]ため十六　昌克

霧おし[illegible]磯と川と[illegible]日の郭　小時

稲刈方と一見つくれ[illegible]と[illegible]年一セ　相一

多々[illegible]と一[illegible]ため[illegible]ミカハ　水竹

郭[illegible]く[illegible]むこ[illegible]や[illegible]の[illegible]イヨ　雪居

秋[illegible]や[illegible]雨[illegible]ヲハ　雪樵

川[illegible]一[illegible]女良[illegible]トサ　[illegible]

又月の[illegible]ら[illegible]盟[illegible]年　[illegible]

名月や[illegible]ヨ[illegible]夜[illegible]ヨ　姫山

[illegible]の[illegible]扇の[illegible]より　乙良

山[illegible]月[illegible]九月の[illegible]　善宝

[illegible]月[illegible]て[illegible]の[illegible]カく　遠平

軍[illegible]八[illegible]の[illegible]の[illegible]　太郎

白地[illegible]見[illegible]秋　重吕

去憐寺の第一の景　上サ　春人
秋とも紅葉の折もまた　霞雲
見る目繽紛踏らさまさる　シナヌ　菅古
笠置寺古跡も秋の月　上毛　汀秀
人行るさ海や岳出雲乃玉　三封
ふる雲とは秋や山の秋　無名
月出て京をつるや月の雲　碧堂
東ふんと廉ふる見如かけるぶ　巳明

岩うけの雲ふもふる紅葉の郷　紀言
投ふるの家ふも去る如角カ氣　琴堂
降雨西立竹ふるや谷乃雪　芦江
紅の長川魚住むひと葉ふる　オク　清素
住合の雲ふや明石うる　二栗
秋ふ月やふる葉の如ふ雲の中　テハ　古翠
ふる岩ふふふふも鶯や江乃柳　瑛山
婚ふ日ふふふふふく拾投ふ　二丘

立てる時と考へる剃髪の要　テラマエ　西先

水おと戒鐘と時をおしらせる　梅芳

掃屋もひと年ごとや忘れ　上サ　呼牛

一人居て淋しうなる夏れ撫ぶ　カヒ　蛍雪

立錐も踏屋しの手数蓮蔵ぶ　イセ　石鼎

未だ体むせもの蓮くしし涼り　流芳

ものゝ傷りと出て居る線や筆の音　ヨク　祭魚

歩行るひい蓮る手を手を重の自　法師

木の葉うつ雨もまのしと秋近し　テハ　市柳

通りなる烟乃ゝ帰ゝ秋の雨　サト　良淡

稽古のゝうしくや小系歩　ヱト　四山子

笠の身も軽ゝ蓮ゝ蓮ゝ　由誓

文月やるも京を去る侯雪重の射　得蕉

蓮る露去る蓮稲乃ゝ穂ゝ　梅室

雪の跡十日の月出義を乃花　寄春

行秋と稲てや時の立　坎果

老の身に秋を覚ふ所かな　杜有

麥の穂乃芽ふきて踊る　等哉

氣の沼祝子ちる庵に稲莊　素明

ひつ春ちる麦の音絶て紅月　伯逸

浮ちに乗ひ絶ぬ蛙や蓮しる　蓮丘

稲ちさ紀て麦とかち処隅田川　青宜

竹葉の吹て垂ちる者可雅　渚邑

所知ち氣乃ひふ殘暑ち年　野坐

おとろく や眼先ち白ふ蛍ち海　巨之

文ち程春ち文字や星の秋　白光

末松ちのまちち地底乃星　定〻

四ふ雪やちち地明ち春の雲　樹年

大文字のぢち行方無かち秋ち　半湖

是うけて恒松ち蛙ち乃ち乃ち　正俊

（ムサシ）

資質小ち元も洲海ぬ西風ち年　壽石

忘月や本蓋の布ち文九十九里　為一

其角

冬ごもり部

屠られて運ばるゝ枯野かな　ヨク有節

ちの内の夢や雪ふる秋　ナニハ淡叟

冥途より枯れ新菅の長き蓍　其山

神しめの曲がりを時雨乃渡るなり　ナクラ琴陵

青柳や世間の海老新知恵　台〻

岸の竹も波に消て雪の春　山公

流れたる枯れを仕舞ふ　イヨ篁園

著於て見るかの入日の面　トサ　筆崖
所も祈る山路の二番鶏　吐流
埋火やふる雪踏て古今　馬岱
思ひ代の春深雪の大晦日　アハ　素葉
霧うつも裏の立木新大根引　ミカハ　蹇馬
子見てこやうよ抱る挿う鞭　カヒ　歓哉
一寸ちる花はやて古今　陸花　サカミ　援坐
猶のけや新年の梅の蕾　シナヌ　梅蕾

和の中ちつる蕨赤や雪ちる
興ちて二つ無のある雪見の郡　上毛　分尾
元旦くと戸をあけの青や雲の子　毛郎
鶏の来て郡うふる古篠神今　祇仙
ちちち歯や雪の江を水老行　一朗
明世と世紀よ明る定居場の系　テハ　松花
古の蕨一や常乗すとくーち　ハロさ　春坡
行ひちやうを茅ちて一を茅　素象

拾人ちと帰りて屋敷 水 平 如息子

人とせる人無尽ちて 宿くちて 又〻

十月や飯ちかるる木の かすみ 兼都

傘さしと旅人を集ふ小さき舟 流芝

老くちて春さえ見せる雲ぶ 乙雄

鈴ちみや仙船のうつり 絵しら鶴 金令

手鞠のやや人の俗さち春ち 宝之

鐘ちるいやふ寄めち夜雪ち 木鳥

尼ぬもて雪ふく松の本立の郷 鼠宝

不老ちえて所ちかる拾遺 雄大

景ちも又自らも松の西岸 傳水

川ち鶴や花ぬさえ元行人ちる 漢岳

遊ちち侍も遊ぶて神むる 風外

戸を閉ちちけい都ちる時白ち雪 雲子

川魚の稗ち加敷ちさす郷 鉢力

聖ちもちきやちる茂蔵ちる家 五渡

橋の人をうれすやゆきの義　梧青
かるもすく面あき白髪の雞　南海
月の松を桃折てゆかるる　壽柏
折ふしてもとゝ桃ハうえす帰り花　路聲
橋ゝ尽ゝ多摩川　柏尾堂
鬼の祖よ迷ゝ孝ゝや重忠を　逸雲
むゝ多川白ゝを幸のゝゝ　一晃
岑ゝ海を泳ゝ海ゝ　蓮山
　　寄三

稀ゝ多ゝ書ふ孫ふや離ゝ　竹山
涼蝉猶のゝ文義　逸岡
墓ゝ水川蛍ゝ為ゝ　山
聖屋安　雪ゝ幕ゝ　岡
飼蛍の庵ゝ月小餅ゝ　山
ゝ秋ゝ月ゝ　岡
分料ゝ秋ハゝ解ゝ　山
ふ竹ふ蝉　玉一遠やゆ　岡

山　いのちの長さを長くもとめ給ふ事

岡　拾ふ事むと仕ふ事無用

山　銭財をつけそハ重宝也と思ふ

岡　家のとり持ハ武家の客人

山　大陸の所ゝ有り

岡　多分の人数の和合

山　無つさふ為ハ多ゝ物の出仕

岡　第一先手を打ゝ事

山　山の雪里ゝさふ吹ゝ事

岡　半も田舎も常ゝ清潔

、　見物乃見ゝ生を生

山　はゝ親を加ゝ妹

岡　分の代乃恵ゝ松のふけ

山　除雪ゝ人ゝ常ゝ乙雪

岡　ゝ雪乃俗ゝ集中ゝ様子情

山　半ゝ家を空ゝ空ゝ

道も啼ふ和尚を嫁てやるかわり　洞

笠のまゝしてまさむすの色　山

宵のくちは串乃さし梅見てぶ行　洞

月は涼しう地黄坊乃路　山

伴野猿も近まとしの一まゝくゝ　洞

調子は酔を霧に吹ゆ　山

茶に気梅津うつ枝横に見えと　洞

おとろき散るもすゝふ筍かる　山

納蝶の消さもおり嫁石空森　洞

世川と寿の桜節句被ませ　山

花乃香も誘う露雨に押すかし　洞

風枝つけしくかれ露寄　山

宿の里種まで何心る飯気　升山

今度すの親の志をぬ波出蕪　涼松

[illegible]の海光[illegible]

小橋の角乃[illegible]

華畑小路[illegible]の角ふ[illegible]

新町[illegible]竜乃[illegible]

裁縫[illegible]家の[illegible]

[illegible]

冠[illegible]

関屋[illegible]

李秀

山

松

秀

山

松

秀

山

関角[illegible]

[illegible]

京[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松

秀

山

松

秀

山

松

秀

宗師遠稲の為よりて集を造
源金吾殿あるよりは荷擔の
古移成りの事を移す

節笠を蒙る時自然の雨を
和歌の道徳海内を傾ふ
宗匠流れ行く人おもひしく
老忘を蒙るみ恵もまた
ちぬ作者を学む

逸淵

まるるしめ家と新雪を和

竹山

文芳園主人

今朝春の梅ん中に笠を
移る松竹の五日目の
春ありしかの春
出のしかの
久保さ
雪の世にた
まるしかの
さ
さ
さ

三一集おぼつかなきに初て逢ふ
歟等おなじの事共に時の
間隔おきて所のふる

弘化乙巳十月

義事おなじ事の
ぬしの人
ゝ事尾道同里